

宇都宮の

宇都宮市文化財保護審議会委員 大嶽浩良

戊辰戦争

慶応4(1868)年3月下旬、会津藩は宇都宮藩領境の古賀志山嶺赤岩山にまで進出し、宇都宮城下を遠望していた。同月中旬、譜代大名でありながら藩論を勤王で統一した宇都宮藩家老縣信綱は、3月29日武州板橋宿にいた東山道総督府に歎願し、援軍2000人の兵派遣が決まった。一方、江戸開城に憤慨した旧歩兵奉行大鳥圭介率いる旧幕府軍2,000人がフランス軍事使節団から訓練を受けた陸軍精鋭部隊に桑名藩兵等も合流し、が下総国府台(千葉県市川市)で日光への進軍を決め、4月11日松戸から前軍と中後軍二派に分かれ北上してきたから、下野地方が戦場となる危機が迫った。

旧幕府軍の宇都宮城占領

小山宿の戦いで勝利した大鳥圭介の中後軍が、飯塚宿から鹿沼に向かっていた頃、下館経由で芳賀郡に進攻してきた会津藩士秋月登之助・新選組土方歳三率いる前軍は鬼怒川を渡河し、4月19日の早朝、南東の方向から宇都宮城を攻めた。

宇都宮城への進攻当日、前軍は本陣とした河内郡蓼沼村(上三川町)の満福寺門前で血祭りをおこなった。進軍中、久保田河岸(茨城県結城市)で捕らえた黒羽藩斥候(敵偵察兵)3人を軍神への手向けとして処刑したのである。

前軍1,000余人は二手に分かれ、間道を進軍した。対する新政府軍宇都宮藩も、烏山藩の支援も得て東南部の砂田村や平松・築瀬村に出撃し、待ちかまえる戦術をとった。しかし、両藩兵ともに刀・槍・火縄銃主体の旧式編制装備で畑や平地林地域に兵力を分散させたから、「東照大権現」と書かれた白旗を押し立て、ラッパを合図に畑中を散開し進軍する旧幕府軍に、ひとたまりもなく撃破された。

宇都宮城下の特徴は、城が北向きに作られ、日光・奥州道中は城下の西側と北側を走り、奥州からの守りを意識した町造りが特徴であった。北・西部に分厚い備

えを配置した宇都宮城ではあったが、南東部に弱点を有していた。田川という小河川が流れるだけで、渡河すれば攻めるに都合な場所であった。「大手門は濠も深く堅固であるが、東南の方は雑木林と竹藪からなっていて、土塁も低く空濠で防戦するには困難だ」(大鳥圭介『幕末実践史』、口語訳)。これは旧幕府軍首脳部の認識で、攻略は東南の方向から始まった(図1参照)。

旧幕府軍は築瀬村の名主宅(現在の築瀬小学校あたり)に火を放つと、辰巳風におおられ、瞬時に市街地へ燃え広がっていった。新政府軍・宇都宮藩兵は、田川にかかる諸橋を落とすことなく退却したた

の戦術錯誤であったという指摘も多い。前線指揮をとった家老縣信綱は、敗北の主因を「本藩の兵士は近隣で起きた一揆鎮圧のため、日夜奔走して休むことがなく大変疲れ果てていた」(口語訳)と、直後の日記『戊辰日誌』に認めている。城を去った藩主と藩士は、別れ別れに館林へ向かった。

安塚の戦い、篠突く雨のなか、新政府軍の逆襲

宇都宮城は三の丸まで焼失したため、前軍は19日夜、蓼沼村の本陣他に戻った。鹿沼宿に布陣していた大鳥の中・後軍は、宇都宮城の陥落を知ると、20日日光への進軍を変更して宇都宮に向かった。城下は硝煙たぐい、余燼くすぶる状況で、城郭には黒こげの遺骸が残っていた。旧幕府軍

の記録には、城内にあった金3万両と米3,000俵余を接収し、城下の焼失家屋に米300俵を供出、さらに城内に囚われていた農民21人を解放したとある。彼等は藩が新しい税を割り当てた際に、抗議のため城門に愁訴を行った者たちで、藩兵の砲撃を受け27人が殺され21人は捕縛された。旧幕府軍に述べた。縛を解かれた農民たちは「大変喜んで、役に立つなら城に止まるから自分たちを使って貰いたい」と頼んだ(『浅田惟季北戦日誌』『復古記』第11冊)。愁訴は2月のことなので、世直し一揆に先立つ1、2カ月前のことで、ある。これを裏付ける地元史料がないので史実の確定はできないが、いずれにしても新政府・旧幕府両軍ともども、町民や領民の動向を意識しながらの戦争であったことを物語る。この日、秋月・土方の前軍

も再入城し、大鳥軍に合流した。小山での新政府軍の敗北の知らせは、板橋の東山道総督府に伝わり、救援隊が三次にわたって派遣された。因州(鳥取)藩士河田左久馬率いる山国隊・鳥取・土佐藩兵混合隊。総督府参謀伊地知正治率いる薩摩・長州・大垣藩隊。野津七次・大山弥助率いる薩摩・大垣藩隊である。山国隊とは丹波国(京都府)山国地方で結成された草莽隊で、山陰道鎮撫使西園寺公望の檄文に呼応して出兵した農民出身部隊である。その一部が東山道軍に加わり、斥候部隊の役割を担っていた。京都時代祭の先頭を飾るものとして名に今に伝える。

河田左久馬率いる救援軍が一路北上してきたところ、宇都宮落城の情報が入り、前進目標を壬生城にとった。壬生・宇都宮

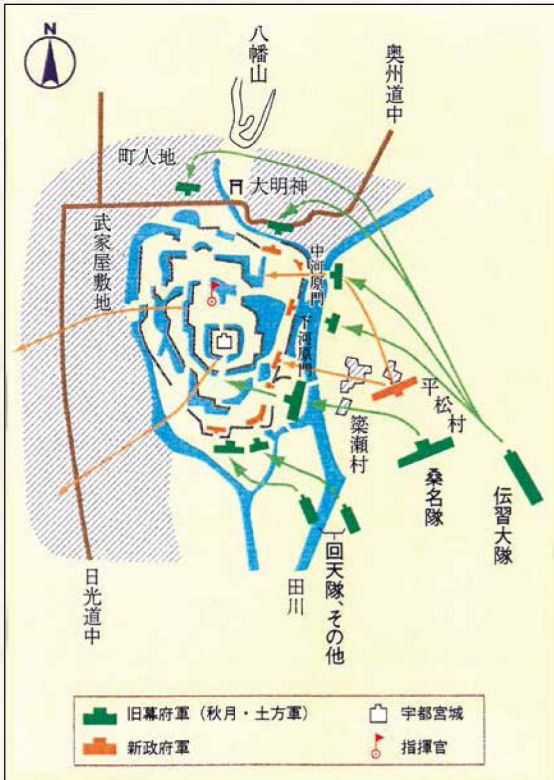


図1 旧幕府前軍の宇都宮城攻略要図(4月19日)

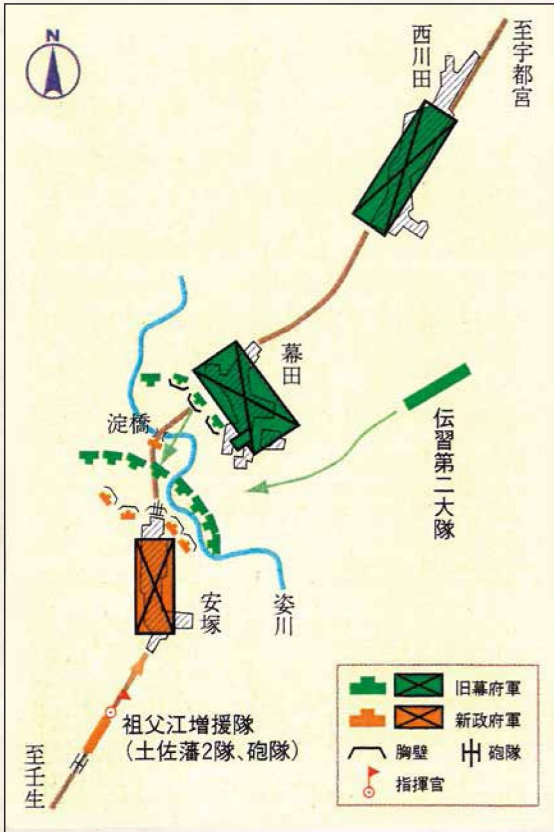


図2 安塚付近の戦図要図(4月22日払曉)

め、旧幕府軍は容易に田川を越えた。旧幕府軍は諸方に放火しつづ、燃え上がる火の手のなか、中河原・下河原門から城内に突入していった。城主の控える二の丸館に銃砲弾が打ち込まれ、郭内では白兵戦(刀剣による接近戦)が始まった。激烈な戦闘は六時間くらい続き、旧幕府軍の優位が確定した。新政府軍・宇都宮藩は退城を決意して、二の丸館に火を放った。敵の利用を考え、燃やした方がましと考えたのだろう。

火焔に包まれた城下は、48町のほとんどが焼失し、材木町あたりがわずかに焼け残る有様で、町民の尊崇厚い宇都宮大明神(二荒山神社)も神領農民の必死の消火活動にも関わらず、焼亡した。

後日、敗因について宇都宮藩は、旧幕府軍の最新鋭兵器や洋式戦術に後れをとっていたからとした。しかし、定式は籠城戦で援軍を待つ作戦をとるべきであり、指揮官



写真1 鞍掛山石窟の入口一藩主が館林に向かう前夜、過ごしたと伝えられる



写真2 戊辰役戦死之墓(壬生町安塚)

間は17キロで栃木街道が結ぶ。こうして栃木街道、とりわけ中間地点にあたる安塚宿が第二次攻防戦の舞台となった(図2参照)。

大鳥圭介は安塚口正面攻撃部隊、安塚宿東から側背を攻撃する部隊、遠く迂回して壬生城を襲撃する部隊の三つに分け、新政府軍を打破しようという作戦を立てた。22日の夜明け前に、戦端は開かれた。安塚にかかる淀橋を越えて安塚宿北端にかかるところが戦場となった。新政府軍600に対し旧幕府軍の正面攻撃部隊600が雌雄を決する戦いとなった。当日は風雨激しく、明けやらぬ暗闇の中での応戦となった。

銃撃戦が展開され、新政府



写真4 / 戊辰薩藩戦死者墓(宇都宮市西原1丁目、報恩寺境内)



写真5 / 戊辰之役戦士墓(宇都宮市西原1丁目)

ため、栃木街道を北上した。主力部隊は前日に壬生へ到着した薩摩・大垣藩の連合軍で、指揮官の大山弥助(巖)と野津七次(道貫)は、後年の陸軍卿や陸軍大将となる名将であった。

大鳥圭介は日光転進の命を下していたが、新政府軍の進軍を聞き城下入口を固めた。栃木街道の城下入口は六道の辻と呼ばれる。栃木街道も合流する交通の要衝で、ここが戦場となった。大山は有数の砲術家であり、かれの指揮する四斤山砲は外国製を改良した「弥助砲」と呼ばれ

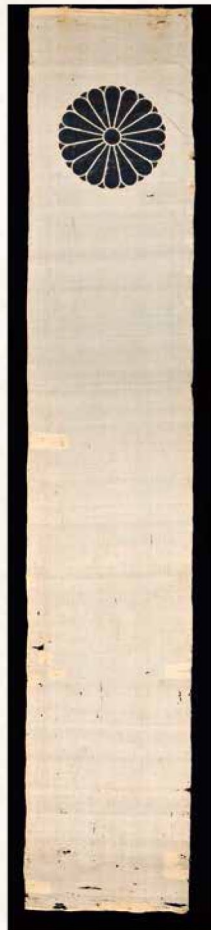


図5 新政府軍旗「白生絹御紋之旗」(上)と「菊御紋紅大四半」(下)(いずれも宇都宮二荒山神社蔵、栃木県立博物館提供)

軍は四斤山砲で砲撃したが、戦闘は旧幕府軍優位に進み、宿内へと迫っていた。しかし、安塚宿東を側面から衝く部隊は、暗霧と冷雨のなかで道に迷い、淀橋の手前の幕田に着く有様で、効果的作戦とはならなかった。壬生城にいて苦戦の急報をえた河田左久馬は、予備隊を引きつれ安塚に急行。ここから新政府軍の逆襲が始まった。河田は退却する味方兵に、抜刀して「退く者ハ他藩トイエドモ死ヲ免レン」(池田輝知家記)『復古記』第二冊)と叫んで押し戻した。河田の陣頭指揮や予備隊の砲撃で戦況は一変し、旧幕府軍は姿川辺に後退した。ここでの攻防も旧幕府側に不利で、幕田村の民家に火を放ち、西川田へと退却していった。

この日、大鳥圭介は体調不良のため宇都宮に在城したままで、直接の指揮は秋月登之助が執った。死者だけみても旧幕府軍6、70人、新政府側17人と大差があり、「本日の戦争八分の敗績

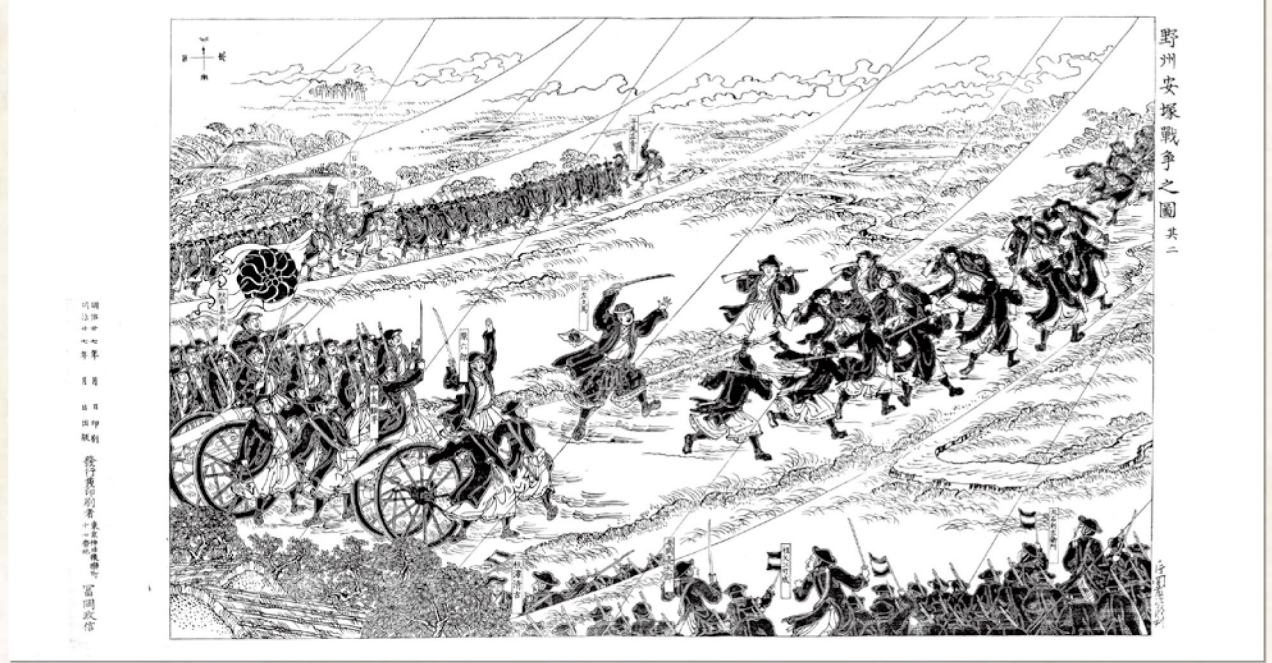


図3 野州安塚戦争之図、其の二「河田の逆襲」(個人蔵)

なり」(『幕末実践史』)と自軍の敗北を認めた。市川国府台を立てて以来、はじめての敗北であったが、戦場における指揮官の役割がこれほど比較されて論じられる戦場もなかった。

**六道辻の戦いから
新政府軍による宇都宮城奪還**

壬生城を攻略できず、八割の敗北に終わった安塚の戦いは、大鳥圭介に少なからぬ衝撃を与えた。新政府軍も同様で、一翼を担った土佐藩兵も20数人の死傷者を出すなど大きな打撃を受けた。

23日、新政府軍は宇都宮城を奪還する



写真3 / 六道辻の現況(宇都宮市六道町)

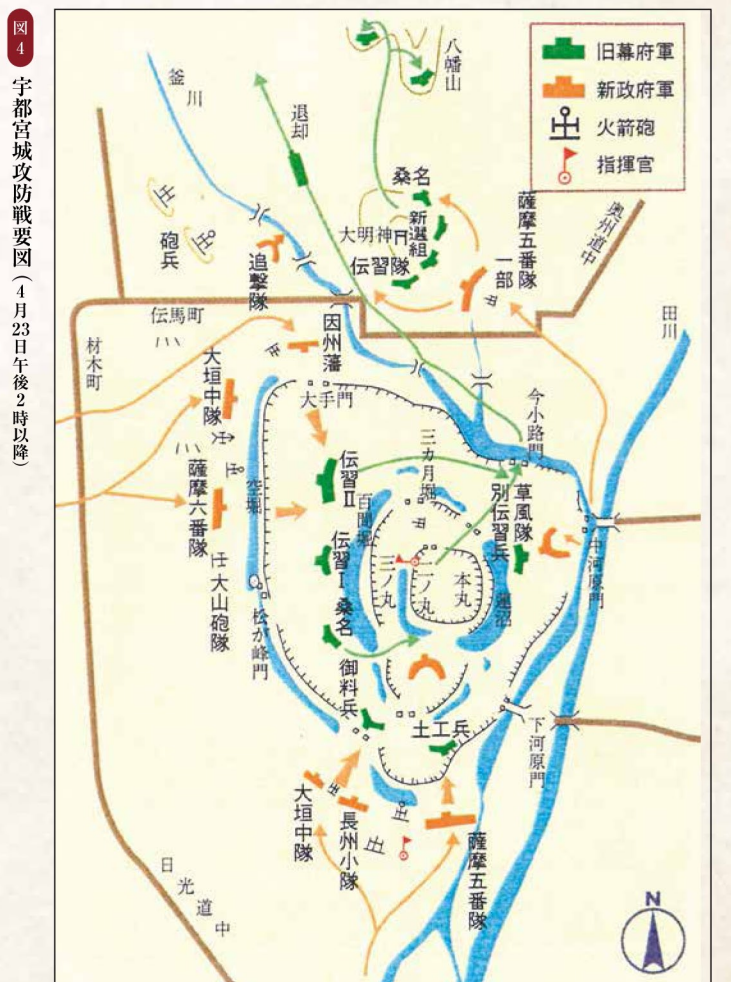


図4 宇都宮城攻防戦要図(4月23日午後2時以降)

たもので、待ちかまえた旧幕府軍を破壊した。午前9時頃であろうか、四の筋から一の筋の武家屋敷になだれ込み、松が峰門に迫った。しかし、北方から西方にかけて宇都宮城は堅固に築かれていて、ここからが一進一退となった。西側空堀土塁上に散開した旧幕府主力軍は、突撃する新政府軍に向け銃火を浴びせ、松が峰門付近一帯では白兵戦ともなった。野津は傷つき、旧幕府軍参謀の土方歳三も足首を撃ち抜かれた。

正午過ぎ、大手門付近を守備していた旧幕府軍一隊が伝馬町を迂回し材木町へ進んだ。大鳥の手元にいた二隊も同様六道口へ出て新政府軍を後方から襲った。最後の部は輜重隊を奇襲し弾薬を分捕る作戦に出た。三方から包囲され、新政府軍は窮地に陥った。戦局は急変し、陽動作戦を使って滝の原付近まで退却した。

午後2時半頃、救援部隊の伊地知正治隊が日光街道を北進し、宇都宮城南の

地によりやく到着した。大山・野津隊へ弾薬と食糧を補給する一方、城南の地から攻めだした。滝の原には河田佐久馬率いる大垣藩兵も後方支援にはいり、再び宇都宮城総攻撃が始まった。南部からの攻撃部隊は二手に分かれ、一隊は東部を迂回して旧幕府軍が占領していた明神山の攻略にかかった。こうして夕刻、宇都宮城と大明神に立て籠もっていた旧幕府軍は、一斉に八幡山から北方に逃れ、左折して日光に向かった。宇都宮城は再び新政府側が掌握するところとなった(図4参照)。

24日、宇都宮城は帰城した宇都宮藩家老戸田三左衛門に引き渡され、藩主忠恕が館林から帰宇したのはその3日後であった。宇都宮藩士は城奪還の戦闘に加わることなく、城に戻った。

※ 図1・2・4、写真1・3…大塚浩良「下野の戊辰戦争」(下野新聞社)より転載
 ※ 写真2・4・5…『とちぎ』(第331号、平成7年12月号)・栃木県広報協会より転載